

## 【「復興とは」報告フォーマット】

1. あるべき「復興」とは何か、あなたはどのように考えますか。
一人一人のかけがえのない生に思いを馳せ、希望をもって生きていく現実と一緒に構成していくこと。「そんなことは“現実的に”無理だ」と思える場合にこそ、既存の枠組みにとらわれず、智恵と体力を絞って生き抜く姿勢が“あるべき”だと思っています。学術的な議論、思想のぶつかり合い、もめごと、誤解、どれも「被災者を視野に入れて行うなら」歓迎されるのが“あるべき”姿かと思います。
2. あなたの復興観におけるキーワード（最大10個前後）
かけがえのない生、希望、寄り添う、思いを馳せる、待つ <暴力>への<抵抗>、贈与、知、物語(り)、ローカリティ
3. あなたがそのような復興観を持つに至った背景について
阪神・淡路大震災に遭遇し、なぜか生き残ることができました。ボランティアと呼ばれて、実に様々な人々と関わらせていただきながら、研究者として何ができるかを考えてきました。当時、まだ駆け出しでしたので築いてきたものはなく、特に失うものもありませんでした。だから、色々なことに取り組むことができました。しかし、駆け出しでしたので、何ができるかもわからないままでしたし、実際、できることも限られていました。先輩の皆様の研究や活動に学ばせていただきつつ、常に、それでよいのかと自問することが多かったように思います。試行錯誤の毎日でした。でも、自分が試行錯誤しているばかりで、被災者にとってどうなのかを結局わからないままに過ごしたように思います。中越地震が起こり、あるNPOの方にポンと肩を押してもらった場面がありました。中越に関わらせていただきながら、KOBE（への自分の関わり）は、あれで良かったのかと問い直し、答えが出ないまま震災10年を迎えました。多くの人々に支えていただきながら、KOBEを考え、中越を思いました。そして、塩谷集落の皆さんに出会い、いわば一から出直したように思います。また刈羽村の皆さんにも考え直すきっかけをたくさん与えていただいています。出直してみて初めて腑に落ちることもたくさんあることに気づきました。そうした15年の中で、常に傍で語らうかけがえのない研究者や学生さんやNPOやボランティアの方々との出会い、また、出会い直しました。研究者である前に何ができるのか、何をすべきでないか。研究者として何をすべきか、何をすべきでないか。まだ悶々と考えながら、動いております。今になって阪神・淡路大震災の頃に出されていた声が響きます。おそらく、こんな風に過ごしてきた15年が、私の復興観の背景です。
4. 上記を理解する上で参考となる文献
「仮設」声の写真集（1998 神戸新聞総合出版センター） / 歌「しあわせ運べるように」 小説 弐健二 「未明の悪夢」（光文社文庫） / 震災を機に出版された詩集・歌集・句集（例えば、安永稔和氏の詩） / 渥美公秀「ボランティアの知」（大阪大学出版会） / 見田宗介「現代社会の理論」（岩波新書） / 檜垣立哉「生と権力の哲学」（ちくま新書） / 鷲田清一「<待つ>ということ」（角川選書）